などの城郭都市と釜山・仁川などの開港場都市のプランの構造からわけて配置していた痕跡がみられる。特に韓半島東南部海岸に位置する港湾都市釜山には、朝鮮時代から開港場としての社会的転換点と植民都市としての社会的転換点があるので、朝鮮の城郭都市から近代植民都市に変遷する京城と平壌とは異なる社会歴史的状況が存在する。これら近代植民都市のプランでの日本式新地名の象徴性を考える時、釜山という場は、日本人の立場からも郷土的色彩が存在していたのではないかと考えてみた。すなわち、古来から、釜山の地域性には海を舞台に生きる者の夢を受け取る包容力があった。

【コメント】　金　徳鉉

プサンは、今、21世紀に向けて東アジアの中心都市として浮かびあがるため、経済特区を推進している。ここで、一世紀前の20世紀初めの釜山を考察した論文を読むことは非常に興味深いと思う。発表者は日本帝国主義（日帝に略称）強占期の都市発展に焦点を当て、“日本人に特別な存在であった釜山[1]”について考察している。これは現代韓国地理学者たちがこれまで注目してこなかった、植民地時代という韓国近代化のくらい部分を冷静に分析したもので意味深い発表だったと思われる。

朴先生は釜山の都市発展を朝鮮と日本の長い交流の拠点という視点から三つの論点で考察している。

すなわち、①開港と鉄道開通を中心にした交通の拠点として、釜山という都市の成長、②植民地都市の重要な特性になる原住民と植民者たちの居住地分化、③結論のかわりとして日本式地名の考察、である。

1）開港と鉄道開通を中心にした交通の拠点として釜山という都市は成長した。交通手段の発展を起爆剤とした都市成長は近代都市の共通の特性である。特に釜山で都市発展が著しかった場所は近代以前から日本人の拠点であった倭館を中心とする草梁一帯であった。このような点で、韓国近代都市発展と日本植民政策は一定のかかわりをもつ。

2）この論文では詳細に考察していないが、植民地都市の重要な特性になる原住民と植民者達との居住地分化に注目したい。近代都市は植民地支配過程で形成されながら、植民者達の居住地が原住民の居住地と違う所に形成され、そこが新しい中心繁華街として成長し、近代都市発展の軸をなすことが一般的である。‘新市街地’を形成する外来人の居住地（釜山の場合、日本専管居住地を中心に）には、近代的機能とこれを促進する下部構造（infrastructure）が集中され、原住民の旧市街地とたいへん対照的であるのが一般的である。特に、釜山は、良好な港湾であり、埋立てにより竜頭山を中心に東西海岸地帯に大規模の新市街地を確保できたの

1　韓国歌手趙容弼の“帰れ釜山港へ”が日本人がノスタルジアを感じる歌謡として韓国歌謡の中で日本人に最も親近感を持たれる理由の一つは“海から接近する人の心”を歌ったからであると思われる。

で、最も典型的な居住地分化が見られたと思われる[2]。したがって、日本植民地時代釜山（釜山府）というのは実際日本人の都市だったと言っても間違いないだろう。一方、朝鮮時代東莱府の邑治として中心を形成した東莱は日帝時代に東莱郡に周辺化された。

3）この論文の最も重要な特徴は、地名についての考察を結論のかわりにしていることである。これは非常に象徴的で含蓄的な意味があると思われる。地名の付け方は人間集団が経験し居住する空間をアイデンティファイする最も基本的かつ代表的な方法で、日本植民地都市釜山の地域性を理解するに当たって有力な指標になる。京城や平壌にも日本式地名が近代交通の象徴の鉄道駅を中心に与えられたが、釜山の場合は日本式地名をもつ所がすなわち日帝時代の‘釜山市’区域で核心地域だった。

この区域は日本人が去って半世紀が経って数百万の大都市になった今でも、都市の最中心を形成していることだ。これは先に論議した開港された港湾に海洋勢力の日本人が進出した釜山;日本人が埋め立てて新しく開拓した新市街地釜山；そして倭館という日本人の長い歴史的縁故地を出発点にして近代都市が形成された釜山；立地・土地領域・場所等、空間の３大要素が釜山で一致したことを意味すると見られる。

今も釜山のCBDの中区の中央洞・光復洞・南浦洞等は全部日本人が開拓した地区だ。少し前まで市庁と主要公共機関が密集していた中央洞は日帝時代“大倉町”、現在最も繁華街の光復洞と東光洞は日帝時代の弁天町（弁才天神社から由来）・琴平町・西町・幸町・本町だ。これはすなわち朝鮮時代倭館があった草梁地域である。また日帝が旧倭館中心の日本専管居住地から離れて居住地を確保するために南海岸を埋め立てて新しい居住地と商業地に開拓した所が南浜町と呼ばれた。これが‘ジャガルチ’に知られている今の南浦洞である。

要するに、発表者は、“朝鮮の伝統都市にすでに存在していた空間秩序に対して、新しい政治体制を象徴する空間秩序の中心位置を変更しようとする意図性のある地名”を付けたと主張する。そして、日本人は開拓した新市街地の中にある竜頭山に神社を置き、それに“近代植民都市の景観 landmark”的な役割を持たしたという。さらに、“海を舞台にして生きる者の夢”を共有するという意味で、日本人が釜山に対してもつ格別な場所アイデンティティを推測することもできよう。

筆者は討論者として、この論文が釜山を単に帝国主義日本によって開発された近代都市に見る視覚を越えて歴史的都市として釜山を正体化することを望む立場で意見を述べたい。

1）巨大都市釜山の都市発展を歴史的に考察する空間 scale を今の釜山広域市の中区と釜山鎮区だけに限定することは日帝によって開拓、発展された釜山の特殊性が誇張される結果を招来した。今の釜山広域市は朝鮮時代から東莱都護府だった。都護府の意味は地域の防衛都市である。名前が‘東莱’から‘釜山’に変わったが同一の地域圏に属していた。従って日帝が開発した新市街地釜山は伝統的釜山地域の一部として見ることが釜山を理解する良い方法だと思

2　日帝による1914年行政区域改編で、日本人居住地の新市街地と隣接地域が釜山府で都市に属して、東莱の伝統邑治と農村地域が東莱郡になって村落として残された。このような状態は日帝末期の1936年まで続けられたが次第に釜山鎮（1936年）、東莱・沙下・水営（1942）等を出張所の形態で釜山に統合して行く。

われる。これとかかわって朝鮮時代東莱府地図、日帝時代釜山地図、そして現代の釜山広域市地図を比較することが役に立つと思う（地図参照）。これらの地図によると朝鮮時代東莱府が現代釜山広域市の主要部を管轄していた。日帝時代には今の釜山市中区と釜山鎮区あたりに釜山市が設定されて、東莱は別の行政区域に分離された。しかし1940年代に再び東莱と釜山は合わされて今の釜山市になった。

朝鮮時代東莱府圏域を釜山と同一の地域と想定すれば、日本とかかわりがある釜山の特殊性は弱まる。植民地都市の一般性は強まる。また、植民地都市の新市街地と伝統都市の旧市街地の二重構造は植民地時代に浮き彫りにされたが、独立と共に新しく統合過程を経ることになる。すなわち、伝統都市の旧市街地区域と近代都市の新市街地区域が空間的に分離されている植民地都市の二重構造は釜山でも日帝時代に現れたものである。今の釜山広域市の大部分をふくむ東莱府は朝鮮時代以来、日本との窓口の役割を担当したし、日本の植民地化が最も先に浸透した地域だ。

東莱邑治があった東莱区を釜山の一部に含めて、朝鮮時代の伝統都市の脈を象徴する鎮山の輪山の下に立地した旧市街地と、日本神社がある竜頭山を囲む新市街地の対照が明らかになる[3]。東莱から草梁まではかなり遠い距離だが、ソウルの景福宮がある北岳山の下に旧市街地と、日本神社がある南山の下の日本人居住地との関連性との類似なパターンが発見される。

東莱邑治は自然地形に依る宇宙論的空間構成（朝鮮の場合は風水）と防禦為主の閉鎖性、狭い迷路形の街路と表現される伝統都市の特徴が典型的に現れる。一方、新市街地釜山は埋立て等人間の干渉で改造された自然環境を機能為主に編成した幾何学的空間構成、接近性を強調する開放性、鉄道に隣接した立地と整然とした街路が近代都市の特徴として見られる。植民地都市でこのような二つの空間構造は空間的に分離されながら機能的には支配と被支配の二重構造に統合されている。釜山でも‘釜山’と表現されている新市街地の区域と‘東莱’と代表される旧市街地と農村地域は空間的に区分されながら、機能的には植民地空間に統合されている。これは釜山市の時代別拡張過程を検討すれば理解できる。都市化区域の拡大と統合過程は最近釜山市庁と主要公共機関の移転を通じて知られる。

勿論、釜山は先に考察したように、その立地・新市街地開拓・歴史的縁故等で日帝下の韓国の他の都市とは大きく違う。そして今もそのような個性を持って、それが地球化時代の釜山の潜在力である。一方、これはまた日本人の郷愁を刺激する。たぶん経済特区が実現できれば日本との往来はもっと活性化できるし、その原動力は上に述べた日本人が開拓した植民地近代都市という点も一つの要素になるだろう。

2）この発表と直接的なかかわりはないが、『東アジア都市形態の文化史』というシンポジウムの大主題とかかわって、この機会に討論者の希望を明らかにしたい。東アジア都市を、特に歴史的な考察における東アジアの歴史的正体性を強調するべきだ。東アジアの都市は、西欧

3　東莱は日帝時代に朝鮮時代の旧市街地と知られているよりは温泉地として紹介された（新光社,1930,『日本地理風俗大系』朝鮮（下）、温泉郷東莱と海運台、p.10.）。朝鮮時代邑治ではない“余暇遊興地”東莱という認識が韓国の高齢層を支配してきた。

が中心になった近代的都市化によって解体してしまう弱い都市だけではない。

例えば、韓国の多くの地方都市（邑治）は固有な都市立地原理と景観配置構造を持ってそれぞれの特殊な自然的社会的条件に適応する形式により数百年間発展してきた。

近代百余年の植民地支配・戦争・急速な産業化と都市化によって、伝統的な都市空間構造は破壊され忘れられた。しかし最近その価値が再評価されて空間的にも再生される趨勢だ。

成熟段階に入った産業化と都市化過程で住民たちは都市・地域正体性を要求して、都市環境と生活空間の美しさを追求しながら都市に対しても景観生態学的関心が増されている。そして自治団体の場所魅力増進の必要性等によって、伝統都市景観は再評価も推進されている。このような脈絡で我らは伝統都市と近代都市を対極的に見ないで、生態学的・美学的な共存と調和に関心を持つ必要がある。釜山だけではなく、ソウルでも、そして筆者が勤務している小さな町の晋州でも、韓国のたいていの都市が伝統都市と近代都市の景観が調和して共存できると信じる。

21世紀の新しい東アジアを展望するこの国際シンポジウムでも、関心の焦点を伝統と現代の共存という観点で東アジア都市の固有の正体性を現代的に証明する機会になることを望んでいる。

（慶尚大学校師範大学）